

図書館の無目的探訪の勧め

人間科学部准教授 中沢 仁

学生時代に読むべき図書、しかも何度読んでも味わえる図書を紹介せよと言われた。自分は学生のときに何を読んでいただろう、読み損ねて後悔したものは何だろう、今の私が若い学生諸君に薦めるべき図書なんてあるのか。どんな書名を挙げて汗顔の至りでしかない。せめて、図書館という存在への想いだけはお伝えしておこう。

ヒトの本質は「知を求める」ことである。その証拠に、乳幼児は乾いたスポンジのように外界の知識を吸収する。しかしながら、集められた「知」が心の中にどのようにして格納されているのかは解明などされていない。さて、いつだったか、見たことも聞いたこともないたとえ手にしてもその中味を理解することなど全くできそうにない書物を捜すために、図書館の中を2時間も歩き回るといった経験をしたことがある。さながら地図を片手に標的を探していくオリエンテーリング競技だ。これが思いの外おもしろかった。図書館は、これまで人類の「知」を具現化しているモノ達が、誰かに検索されることに備えて、ヒトの叡知と工夫によって構築されている精緻な構造体だ。まるで自分の脳の中を探索しているような錯覚を覚えたのだ（そこにあるのは自分の中には存在するはずもない知識たちだけのけれども…）。

大学の図書館は他でもない学生であるあなたのために存在している。一生触れる機会すら得られないかもしれないような「知」もそこには潜んでいる。どんな知識でもいつかあなたの役に立つ可能性はある（もちろん逆の可能性も）。少なくとも知識によってあなたが変わるのには確かだ（乳幼児が知識によって発達するのと同じように）。新しい知識こそが、さらなる知識の獲得を可能にしてくれる。ヒトの知の構造に思いを馳せるかどうかなどという心理学的視点はさておき、バーチャルアトラクションよろしく、人類の知とその構造の一端に身を投じてみるのはいかがだろう。今のあなたなら、入場は無料だ。



権利のための闘争

イェーリング著 村上淳一訳

岩波書店 1982 (岩波文庫)

法科大学院教授 武知 政芳

古典または名著として知られているものは、可能な限り多く読んでほしい。これらの書物の読書案内は、インターネットにより容易に得ることができる。読書案内は、各分野についてその専門的知識を有す者により行われるのがより適当である。幸いにも本学は広範な分野において、各分野の専門家である多数の教員を擁しており、講義などさまざまな機会を通じて読書の案内を受けることができるものと思われる。

法学教育を担当する者として、広く専攻分野にかかわらず教養を深めるために読んで欲しい書物で、かつ「読めば読むほど味の本」ということであるならば、その1冊の中にイェーリング著 (村上淳一訳)『権利のための闘争』(岩波書店、1982年) (なお、同書には小林孝輔・広沢民生による翻訳も日本評論社から出版されている(1978年。))を加えたい。本書は、法も権利も闘争によってその存在を勝ち取り、買いてゆかなければならないものであり、「権利のための闘争は、権利者の自分自身に対する義務である。」などと説くものである。この書物により、社会を客観的に観察するための一つの視点を得ることとなるが、ただ、これを無批判に鵜呑みにすることは、危険なことであることも忘れてはならない。どのような定評のある名著であったとしても、その全部を無批判に受け入れるべきではないことは、翻訳者(村上淳一)の指摘するとおりである。本書においてイェーリングの説くところを信じるのではなく、むしろその妥当性について思索することを通じて、歴史を含む社会に対する興味と洞察力を^{かんよう}涵養することを期待する。本書は比較的頁数が少なく(140頁程度)、翻訳者の解説を参照しながら、思索しつつ丁寧に読み進めるならば、理解はさほど困難でないはずである。